

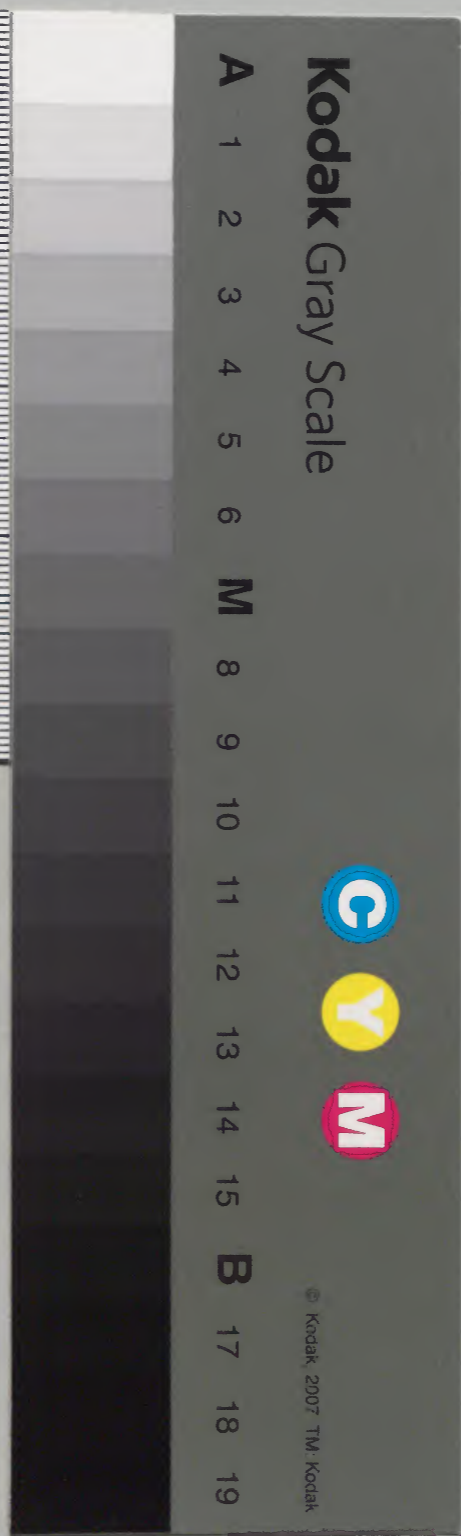
塩尻

二十九

太政官文庫			
		一	和
		二	
		四	書
		九	
六	〃	七	
五	二	〃	
册	架	函	門

内閣文庫			
		一	和
		二	
		四	書
		九	
二	〃	七	
一	五	〃	
架	册	號	類

内閣文庫		
番號	和	11497
冊數	65 (29)	
函號	211	302



丙申九月二十三日東都深川乃弓場以て右
郡熊心二郎^三半堂射越直發一石一千五百九十
矢 總矢万二千
六百矢

熊三郎父の古郡甚五兵衛公儀大秀波 師ハ森清兵衛基記
先年紀列御家人高瀬金弥十五歳にてととに
ふに直發此時一石一 以これと平と猶と
ふくま叔十五矢村越約一 十性質熟用
弓強熟と弓一 矢一 一 孤光老熟勢

高く母と胎空牙楊眼明けく約一と一い
て小童此力らふに至る及此後世のつと
りては 記しせ

○長月未乃五日太宰帥宮有柳川正に親王 薨せむを
ち次りしとて急る者あり 一 御齡二十の
はあしとまへぬ 幸に親王乃後子あり
兼柱川乃御事
壽経之御宮知恩院ハ御一 一 以て既にこれ
うせりしとて 一 御意体此まのめと事

あせまの西にうらみ東にふけ
八人乃乃常ふらうを乃上宮乃左に
これの面しを此常白し御洞
去りも多々ふにし無常を能の
と今し一係にふにそと敷ら
き乃何しふところこめく
伸らふととらふくあ
るにこらとあうはに

あし一他乃風と吹来れあまき
あまきあまきあまきあまき

初冬遊紅樓有感

雲岫夕曛短 海門鳴雁寒

分汎机錦袂 愁殺再難看

又詠緒のまねを
く尚遠山はま
中にし

あのかき

亥乃頌に〜祭

〜文〜

卯月〜

〜

凡訊々雨簫々涼又〜

初下乃鹿を〜

に〜

瑞鹿老ぬ〜御所諱乃〜

今茲^丙申神無月十有七曰乃御忌に〜

乃徳興山乃御佛事^{干御讀經自十月十日至十六日} 東江〜

〜

〜

〜

〜

御家人〜

〜

こゝろをわたりし〜顔の〜と多〜ぬ
し〜忠の〜ぬ心は流〜し〜は〜り也
や〜ろ 御恩の〜〜報〜奉りは
今、口は〜一而部は 祈禱経読誦〜奉
て御菩提と祈を奉〜と〜十六夜月
下〜り〜けり〜

踰躄寒鳥去無回 落葉夢寒坐助哀
孤月露情為誰白 繞垣秋新テ只荒苔

〜〜〜乃一河〜月〜
見都鳥世を去る川は初冬なり今年は乃此宿也

河上無空恨 同言秋認人

悔鳴去都鳥 汝蓋慰吟身

水仙花

猗々琪樹竟無色 艶々桃花猶有香

獨見山葩凌浪潔 更笑雪裡發新芳

荒竹離三葉凍枯楓寂 夕紅曉色水清

此花乃つ々中にさゆ細と云い凡の如く
ゆきう〜東部し〜海よりりあ〜津に
月乃初をさ〜中〜水仙花多し
十月六日秋屋形め〜大樹御任櫻乃御
う海少〜以幕下此羊老と巻き〜
檜高柳素比栂高柳素比床と兩雁〜石
花挿はと水心橋ふとささ房少〜梅
しと早〜ソ〜物と〜さ〜く〜

番とたふの〜ゆ〜と凌浪仙乃色
と〜〜〜

冬乃月
冬乃月乃〜
冬乃月乃〜

十一月十三日 女御前物政弘熙云御女
梅常居下 入内定守し
柳菅と〜御使松江侍従
宣隆朝臣朝臣 副使ハ中條對馬守と云十月
十六日上院乃 仰とゆ〜〜緑楊柳

宣澄朝臣に黄金百枚時服十御馬一疋
對馬守に黄金二十枚時服五

凡三家に御方加賀守相薩摩中将陸
奥中将以下四品已上乃諸家主上御方
御馬と献し 世御へ白銀とさ
はし 15) 受如乞規

十月廿日 將軍家御誕日、御祝儀
齋廿日ふれも 大猷院殿御忌日故廿日
用しふと云

● 省早梅

梅似有情拂玉塵 江南十月一枚新

羅浮殘恨離蓬夢 孤枕鐘寒更惱人

そはかに雪のしらけに梅乃さき
あふりしと浮世はるるといふとて夏か
さ囁乃初はえししとくはくとかく
越えうしとくしとくこれゆり

ゆきをいふと梅のさき初ははるるこのさき

。從子勝氏書と投——一詩と題と如く
彼詞に

九月尽に御懐吟——感多——賈島
と知て指并列是故郷と詠せしむ
一平乃花紅葉に別多の如く
海さ——とふ——し——とや——
て

笛韻因山遠

晚風紅樹寒

感多遊子意

眺望惜秋殘

返事は、
~~~~~

花時鳥月雪看尽武陵四序乃也  
音と今と餘波乃日町——古郷人  
乃一詠い——懐ひる——使はる也  
て一初乃和ま——と——半——  
~~~~~

東海家千里

對孤灯影寒

別雲又傾月

愁眼曉霜殘

題好戲子盆圖

花面玉姿生得十二方的嬌治踏丹机
金蓮輕歌春曲合、秋波強使七上八下
的着的人都三魂漾々六魄蕩々
茶師如柔の八喜蔭發遣西方のる
う~~~~南の院の瑠璃るる奉

古里にあつて人と西行

今にに〜山の間月

唯色はて〜の帆は春多能をよ
清少納言の書けるけめと花子親月をの
福に養へ階の弱れ足るや限有素部
乃ほ舟程の〜別と告る朝即りぬる
の〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
若油〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

吉原公

花〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

之

らるるにく末の山よりたのむるもさるるに別れ
別れは海の街にたのむるもさるるに別れ

送行

有興言

勝子癸時東方白舟帆吹葉点、別延
諸生依々造門端六翮翩翩々飛天辺
手攀芙蓉千秋雪回瞻蒼海後似杯
分離伏誰解客情天涯更無因追陪

吟童命酒上高樓樓上慷慨悲歌起
生平寂厭晚唐調夙志欲逐建安軌
君不同明象氣運盛王季二生勃々
出當時咳唾皆珠玉五嶽之向紫煙密
嘉隆數子今何在大雅不据得才難
長嘆歎以錦中懷忽同座客唱渭城
君還得見南溟子道余石碣碑在

東京

半明何くくゆくとん此れ余は水と
外山の菴ふくを海に立出く
に清くはき

定國一しきふくく門の
路を人ゆくとく友いりて

武野留連花又月 可隣疎境疎和片

統山統水轉難告 都言若書傳一鳴

恨隨江水愁入 荆風候 錦旗亭のこころ

遠さかり 青眼白双交とさりたり夢に
てし冬月日の行福と形れ夕暮に相室
遠死むし 跡乃原と都家柳乃古年
とくもこれゆきし 水原より 高きゆり
夜夜らく流るまきし
ちとて海をぬきのまきし 海をぬきのまきし
管根燈とゆりゆきとく 水原より
流るといふまきし 水原より

箱根山に七不乃湯あり不認湯本芦湯棟捨
唐倉木野宮下塔澤ありとて其東部の人
多し入湯しゆるべし

田子乃浦に東に下りて人よる
人の如きははつて

葛乃 畑屋の今の路あり存り
の時に有東坂に色

古位別とて西と鼻丸地あり
田子乃浦の
はとてとての

乃南乃麓に古道あり

岩あり懸に
麓の麓あり

日暮月出て中夜乃中山とて

池田宿に古治より接する山行興寺
の月には母子丸石塔あり

の月には母子丸石塔あり
墓前梅樹あり

これ女冠の巻也〜中比のれし
望ましく出〜今亦盛茂〜ゆとる
諸事昔時皇に〜用其土之河
上人藤原の事也と云
氣多伊勢佐郡氣賀云に〜今乃は日
吉村の包と〜之テ田邊の昔乃は名は橋の
田壙ハ初村〜カテ西の西和哥は〜細江棚
か〜小舟橋の入口西の西の形也
之と〜程の事也の流名の流也と云

濱高乃 滝石の

神明乃 社〜伊勢里太神宮造替
座此時此系と結と織と勅と〜此酒と
官座乃 神にや濱名郡五座大座乃内河也
ゆ〜九河〜定〜次猪鼻湖神社
あ〜あ〜あ

右乃 山に大福寺葉師 摩多郎寺 継者
密院者 世〜子 濱名納一里ハ世寺

調進せしむ
寺は乃外納を領石
五斗は乃外納を領石
金剛寺と云ふ山
寺と云ふ也

切つた乃右之山はつらつら
一株は古樹なり
之よりとりの西樹
左りハ坊ハ峯大般名石も
本坂乃山際左りに鏡山石
と云ふ

故土俗光石の叫

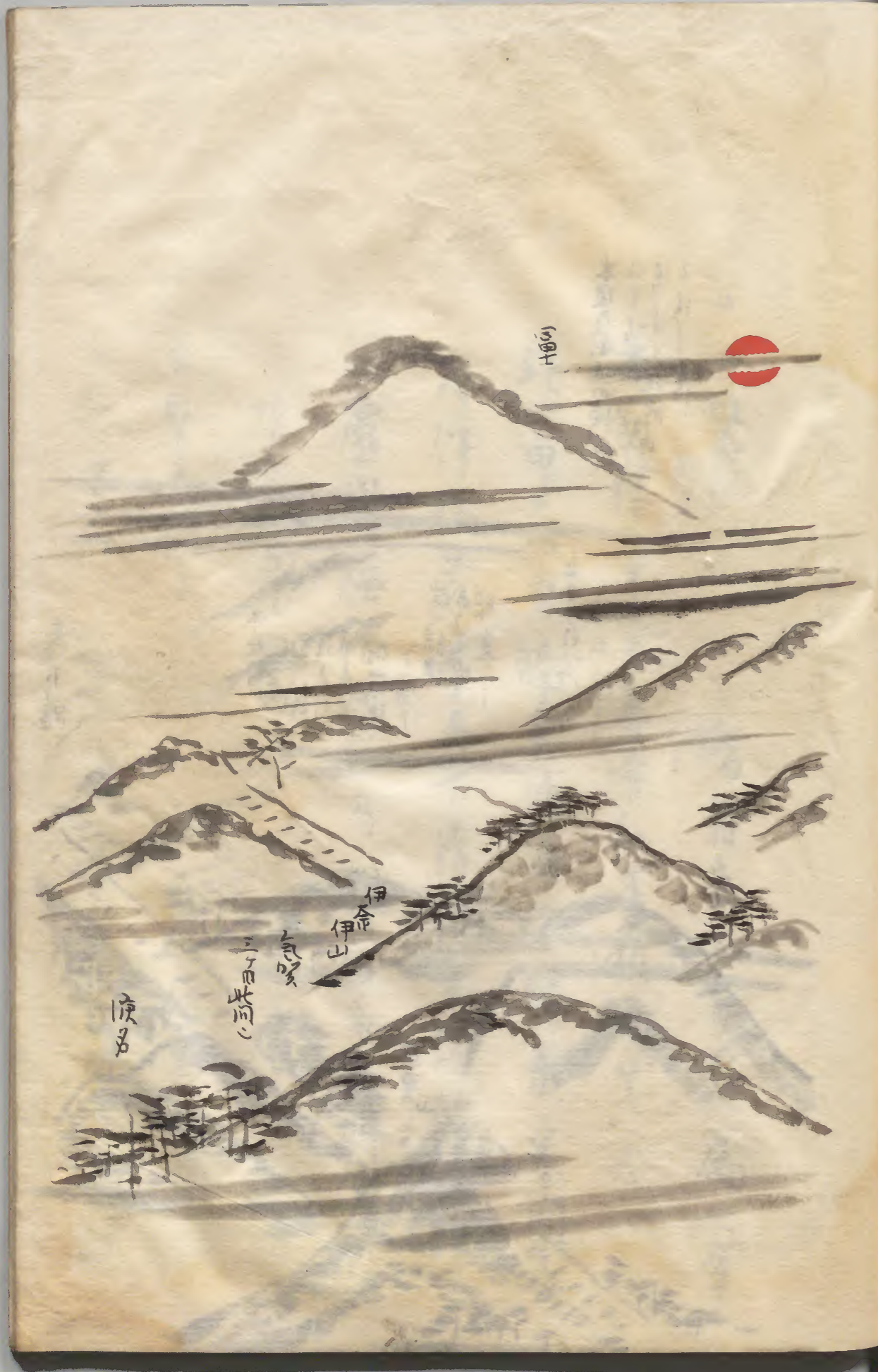
坂乃西に茶磨山石巻山等岩強は

峯乃と云ふ川とて豊川舟也天堂なり

三重塔右ハ本宮山乃御油乃

左乃乃乃乃内には國府宮

去年本坂の道
のこゝへ入る
遺忘はゆ



山



伊命山

三ノ山

候名



本坂路面自見停
改不々々後乃
誤り

南

冷冷坊鳥路村里
家より東二里半
よりありて南遠
由望行
出願す
谷正の独徑
如相境丁白雲
放舟別ふ凡
只之書候
赤之書候
思曲と相相
個東海

有甚老學又不見傍人
候法三千何新塊古岸
濱

前坂

今切渡

本坂峠
遠参堺

入湖

自此

法灯今日照齋會

周說三山絕頂師

予は法師一如外者ハ予上人乃之予也
芳徳の徳とぬれ〜
其徳と和次

兼條松柏帯西相雪

歲月轉多苔蘚碑

猶看寒梅強仙客

玉塵拂去水雲師

暮の書懐

年光何道甚

華影交雲凡儲

大日從他笑

殘冬暫煮茶

李冬廿四之春ふれと世上年乃暮〜梅
柳ぬと〜
乃遠忌に〜と光陰乃泡ゆれ〜
の〜

梅衝臘雪凡光促

柳薄寒塘景色微

老去春來恨存没

市朝新處古人跡

年乃暮に福柱乃上人炬範又乃〜

山王の御印とての山王にほつてて平とあり
久しかり

。産の女にはともほり赤川ふれてとてまゝ元の年流
。琉球國の圖とてに徳王都りて唐のまゝ
。言敷のりての山王に奉神殿歡今門血恩
。亭のりての山王と新と錫糸也花瓶興等と
。赤のりての山王我國皇殿の外と侯國都令
。とてのりての山王野甲にいと詩の詞にあり

かゝる處しと多り先も唐人我國の山王
とてのりての山王とてのりての山王

。享保二年正月 院御會始

岳柳臨水

法皇御制

。皇風はもつとての山王とての山王
。左大臣綱平二條
。柳の赤
。内史宮
。世國のりての山王とての山王

院地御會

從二位權中納言公澄臣御

いそとて柳一本のまゝえさく板せりうらたのぬれ
内の御會

いほしくくはたけりそのあさしくまろくこのま

山姥
宇治の葛原山万福靜寺新建乃 念會ありし

時元曆長治港一天竺の 錫李木多く挿入せ

しと宗福經寺に檀越等信は請て丸上ヶ

宇治に送りて今も佛殿とほくやうに毎に

一奇事いして大光普照因師素化の徳こりる

格北
前報恩證卷造澄上人正徳二年壬辰二月

晦日にうらうら生化しりる 念佛音持

集訂正乃自序は其寂後絶るのやい

のり終焉乃遺偈に涅槃生死兩般法同入

弥陀性海中此の何とたえしとれり

性生乃こぬ此の何とたえしとれり

流て年と何とたえしとれり

乃如之乃浦氏とて其の事なり
ありし一巻なり其の文を以て其の
なりと各留字なり其の法何とてなり
なり

ふて其の事なり其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり其の事なり

群碎録に副刊とて類言なり其の録とて
一と福とて半あり物なり今其の修は

乃其の事なり其の事なり其の事なり

朱拒経ハ唐ハ陸龜蒙の爲とて其の地経

と其の事なり其の事なり

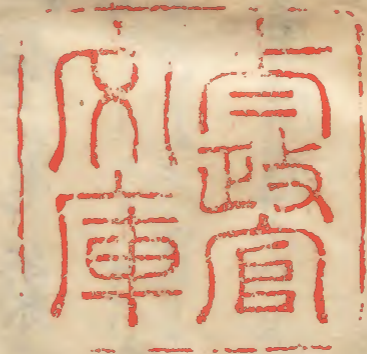
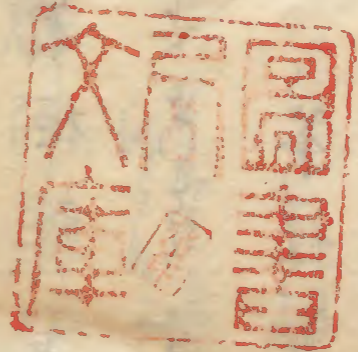
茶経卷三 唐陸羽

酒経 宋苏轼

禽経 晋張華

相鶴経 宋淳化云

相牛経 齊安丹感



讀入〜〜 加多類打多〜 秘系可少現
 とゆ〜 経と儲ひゆとい〜 ちや 荔枝譜 橘
 譜 瓊 香 譜 竹 譜 托 譜 蘭 譜 乃 類 八 七 分
 の〜 ち ゆ ち

